

# エマニユエル・レヴィナスと「雰囲気」の問題

藤岡俊博

## 1 はじめに

エマニユエル・レヴィナスは、精神分析に対する関心と躊躇との双方によってしづけられた稀な哲学者の一人である。精神分析は他の多くの哲学者の注意をたえず喚起し続けたものであるが、この分野に対するレヴィナスの態度は生涯を通じて非常に曖昧なままであった。一方で、一九七四年に出版された主著『存在するとは別の仕方であるいは存在の彼方へ』<sup>1)</sup>には、通常は哲学よりも精神分析に属すると見なされている概念や主題が数多く登場する。実際、レヴィナスは同書のなかで、「外傷 (traumatisme)」、「強迫 (obsession)」、「錯乱 (délire)」——さらには「精神病 (psychose)」——という言葉を用いている。しかも、これらの語が主体一般を、あるいはこう言ってよければ「普通の」主体を形容するために使われているだけに、このことはより一層驚くべきことである。しかし他方で、学問分野としての精神分析と自分との関係が問題になる際には、レヴィナスは、精神分析に対する軽蔑まじりの不信感を隠すことがない。たとえばレヴィナスは、とりわけ彼がフロイトのうちに認めているエロスの神話を幾度となく批判している。レヴィナスはフロイトに対して、彼自身の言によれば深い「敵意」<sup>2)</sup>を——これはかつてのストラスブール大学の師

の一人シャルル・ブロンデルから継承したとされる——保ち続けていたのである。

このような複雑な両義性と明白な否認をまえにしたとき、レヴィナスと精神分析とを直接的に近づけようとする一切の試みは、恣意的とは言わないまでも、いささか作為的なものに見えてしまうおそれがある。おそらくはそのために、この領域でこれまで行われてきた分析の大半はほとんどつねに、レヴィナスと精神分析家（ジャック・ラカンやドナルド・ウィニコットら）との一種の「出会い損ない」<sup>③</sup>について語るのを余儀なくされているのである。本論は、これらの先行研究の重要性を念頭に置きつつも、眼差しを向ける方向を変えて、レヴィナスのいくつかのテクストを精神分析的ないし心理療法的な研究に役立ちうる理論としてではなく、自分自身の経験から——外傷とも呼びうるものから——出発して飽くことなく思考し続けた一人の哲学者の特異な「事例＝症例」として読解することを提案したい。レヴィナスの哲学を、彼が二〇世紀の災厄の前後に経験したものへと単に還元することのないように注意しながら、本論はレヴィナスの哲学を精神的な、あるいはむしろ精神病理学的な視点から再検討することを試みたい。

なぜ精神病理学を援用するのか。それは、心的生に関するレヴィナスの思想をよく示していると思われるものとして本論が選択した主題が、精神分析家よりも精神病理学者にとってなじみ深いものだからである。この主題とは「雰囲気（*atmosphère*）」である。この選択の利点はおもに二点である。第一に、雰囲気の問題はレヴィナスの初期著作にまで遡るものであるが、とりわけ主著『存在するとは別の仕方で』の最終盤で集中的に現れるものであり、それゆえこの主題は言わばレヴィナスの哲学の一つの到達点として読解されることができるからである。第二に、まさにこの主題において、レヴィナスの思想といくつかの精神病理学的分析——それらは現象学的ないし実存論的分析でもあるが——とが交差するのが見られるからである。

以下では、まずウジェーヌ・ミンコフスキーやフーベルトウス・テレンバッハといった精神病理学者のテクストに依拠しながら、雰囲気概念とそれが人間の心的生において果たしている役割を見たのち、雰囲気

の主題がレヴィナスの著作のなかで占めている位置を検討していく。

## 2 精神病理学における霧囲気の問題

霧囲気 (atmosphère) とはなにか。この atmosphère とは、なによりもまず地球を取り囲む「大気」を指す語であるが、同時に、ある国や場所ですべてが吸い込む「空気」をも意味する。ここからすぐさま atmosphère を構成する二つの性格を——これは語源から明らかな特徴でもあるが——取り出すことができる。(1) まず atmosphère は「気」であるから(ギリシア語で atmos は「蒸気」を指す)、不可視であり、実質をもたない。言い換えれば、霧囲気は見ることができず、ただそれを「感じる」においてをかく (sentir)。「呼吸する (respirer)」ことしかできない。霧囲気は、それ自体として把持されることのないまま、ひとが感じるものである。(2) この語が明確に示しているように、atmosphère は一つの「球面・領域 (sphère)」であるから、それはわれわれを取り囲み、包み込むものである。ここから霧囲気のもう一つの重要な意味が生じてくる。すなわち、霧囲気とは、われわれの身体的生ならびに心的生の基盤として役立つ「環境 (ambiance milieu)」でもある。

それでは、精神病理学において霧囲気はどのように主題化されているのか。ウジエーヌ・ミンコフスキーは『コスモロジーに向けて』(一九三六)のなかで、霧囲気存在をわれわれに告げるのはとりわけ「におい (odeur)」であるとしたうえで、次のように述べている。「[...]においては、なんらかの事物のう、え、や、そのなかに拡がるのではなく、取り巻く霧囲気ときわめて内密な仕方では混ざり合いながら、霧囲気に第一の性質を付与するのである」。「世界のにおい」とも呼びうるものと混合し、われわれを全面的に包摂する霧囲気は、物理的ないし感覚的な本性と同様、精神的な本性にも「先立つ」ものである。主体の側において、に

おいの浸透に能動的な意味で対応しうるのは主体の「吸引 (aspiration)」であるが、吸引という活動には一種の受動性が残存し続ける。というのも、この活動はまさになにかを——空気を——主体の内部に入り込ませることに存しているからである。このことをミンコフスキーは次のように言い表している。「われわれの行為の一切は、より捉えがたいようななにか、より鮮明でないようななにか、より全面的ななにか、ばらばらの要素には分解されえないなにかによってあたかも支えられているかのようである」<sup>(5)</sup>。さらにミンコフスキーは、人間と空間との関係を論じた別のテクストのなかで、生きられた空間に固有の特徴である「親密さ (intimite)」が、われわれを取り巻く霧囲気に基づいていることを強調している。「親密さは複数の人間存在を包摂し、彼らを包み込み、その意味では彼らの理解を超えたものである。親密さは『気候 (ムード) (climat)』や『霧囲気』から生じ、それらと同じように、親密さに参与するひとたちを浸すのである」<sup>(6)</sup>。人間存在は純粋な空間のうちに生きているのではなく、さまざまなおいのついた霧囲気に取り囲まれて生きているのであって、このような霧囲気は人間存在どうしの関係をも下支えるものである。

以上のようなミンコフスキーの議論を踏襲しつつ、精神病理学者フーベルトゥス・テレンバッハは、霧囲気の問題に対してより臨床的な観点から詳細な研究を捧げている。『味と霧囲気』(一九六八)と題された研究のなかでとりわけ重要なのは、テレンバッハが、安心感を与えるという霧囲気の保護的性格を強調している点である。反対に、霧囲気の形成がうまくいかず、われわれにとって異質的なものと化す場合には、霧囲気は精神病を引き起こすほどに押し掛かってくると言われる。テレンバッハはある症例を例に挙げながらこう述べる。「保護するものという意味での霧囲気的なものの形成がすでに非常に早くから不十分であったことと特徴的な仕方で対応して——この形成が不十分だったことは、さまざまな遺棄 (Preisgebenssein) の体験のなかで示されている——いまや精神病が、異質な霧囲気的なもの (das Fremd-Atmosphärische) によって患者が圧倒されるというかたちで始まる」。そして保護的な霧囲気が崩壊するとき、このような霧囲気の消滅

は「仮借ない仕方、内面性を異質な介入へと晒す」<sup>8)</sup>のであり、それとともに、主体を取り巻く霧囲気によってそのときまでは守られていた内的領域が全面的にむき出しになるのである。

保護されているという感覚を与えるのに十分な仕方では霧囲気との関係が調整されているように見える特権的な場所は、われわれの「家」であろう。われわれの身体的・精神的生の維持のために家が果たしている重要な役割に関しては、すでに多くの主張が提示されている。そのなかから非常に重要なもののみ言及するとすれば、まずガストン・バシュラールの『空間の詩学』（一九五七）がある。そこでバシュラールは家を「大きな揺籃」として役立つような「人間存在の最初の世界」と見なしていた。<sup>9)</sup>次に、この主題に関する情報に富んだ著作として、オットー・フリードリヒ・ボルノウの『人間と空間』（一九六三）を挙げることができる。ボルノウは——彼はレヴィナスのかつての友人でもあった——家の庇護的性格を次のように説明している。「世界のなかで身を保ち、そこで自らの課題を遂行することができるためには、人間は、身を退け、緊張を緩め、あらたに自己へと帰ることができるような安全と平穩の空間 (Raum der Geborgenheit und des Friedens) を必要とする。[...] 人間は、そもそも単に生きることができるとするには、このような安全の空間を必要としている。人間からその家を取り上げるならば——あるいはもつと慎重に言って住居の平穩を取り上げるならば——それは不可避免的に人間の内的解体 (die innere Zersetzung) をもたらすのである」<sup>10)</sup>。最後に、「霧囲気の現象学」とも呼ばれる思想を展開している哲学者ヘルマン・シュミッツは、内的世界と外的世界とを分離し、場合によっては人間が敵対的な霧囲気から遠ざかることのできるような役割を家のうちに見出している。シュミッツにとって、家に居住することは「感情の安定性」にとって必要不可欠である。<sup>11)</sup>

レヴィナスにおける霧囲気の問題の分析に入るまえに、以上のような精神病理学的研究の検討から引き出されたものをまとめておこう。これらの研究において、霧囲気は、それ自体として知覚されることなくわれわれを身体的な意味でも精神的な意味でも取り囲むものと見なされていた。霧囲気は、機能不全に陥っている

ときにはわれわれを脅かし、主体の内部にまで侵入してくることで精神的な変調をもたらさうるものであった。反対に多くの論者において、心的安定性の保持のために、主体の安全を確保して内面性を強固にする役割が家のうちに認められていた。

### 3 レヴィナスにおける雰囲気の問題

主体の構成における家の地位に関して、レヴィナスはいましたが取り出したほぼすべての点について精神病理学と見解を共有している。実際、初期著作である『実存から実存者へ』（一九四七）以来、レヴィナスは「人間の生において『わが家 (chez soi)』が占めている例外的な場所」<sup>(13)</sup>を強調している。さらに、「分離 (séparation)」の成就としての家のこの優越性は、『全体性と無限』（一九六一）のなかでもっとも明確に主題化されている。「家の特権的な役割は、人間の活動の目的であることのうちに存するのではなく、人間の活動の条件、その意味で人間の活動の始まりであることのうちに存する。〔…〕人間が世界のうちに身を置くのは、ある私的な領域、わが家から出発して世界にやってきた者としてであり、しかも人間はいつでもわが家のうちに身を退けることができる。〔…〕人間は外部にあると同時に内部にあるのであり、ある親密さ (intimité) から出発して外部に赴くのである」<sup>(14)</sup>。前節で見た精神病理学者たちと同様に、レヴィナスもまた家なしい「住まい (demeure)」が主体の活動の基盤として機能すると主張しており、そこに、ドナルド・ウイニコットにおいて本質的な母子関係と近い関係を認める論者もいる<sup>(15)</sup>。

それに対して雰囲気の方と言うと、レヴィナスにおいてはつねに否定的な仕方でのみ考えられている。漠然とした未分化な環境であるかぎりにおいて、雰囲気は存在一般に、すなわちレヴィナスが〈ある〉(Être)と呼ぶ動詞としての存在と結び付けられている。〈ある〉とは、「…がある」という際に用いるフランス

語表現であるが、〈ある〉それ自体は一切の事物が消失したあとに残存する存在であり、〈ある〉によってレヴィナスはいわゆる存在論的差異の改鑄を試みているのである。レヴィナスによると、存在するものがすべて消え去ったとしても、そこから抽象的で純粹な無が生じるわけではない。そうではなく「力の場のように、誰のものでもない重々しい環境のように、存在が残り続ける」<sup>16</sup>。〈ある〉と霧囲気の主題を導入するために、レヴィナスは次のように続ける。「不在の現前としての暗闇は、単に現前するような内実ではない。これは残存する『なにか』ではなく、現前の霧囲気そのものであり、事後的に一つの内実として現われることはありうるが、そもそもは夜と〈ある〉という非人称的で実詞を欠いた出来事なのだ。それは無の密度のようであり、沈黙の眩きようである。なにもない、しかしなにかの存在が力の場としてある。〔…〕このような存在―密度、霧囲気、場に注意を喚起したい」<sup>16</sup>。レヴィナスが「〈ある〉の恐怖」と呼ぶものにこの著作のなかでもっとも重々しい数頁が割かれていることを思い起こすならば、レヴィナスが〈ある〉と結び付いた霧囲気の否定的側面のみを強調しているのも驚くべきことではない。そして、家の保護的機能に割り当てられていた大きな重要性はまさに、霧囲気の侵入によって引き起こされかねない内面性の融解の危険を考慮に入れることと完全に対応しているのである。

しかし、『存在するとは別の仕方では、霧囲気の侵入によって全面的に破壊された主体を提示するまでに至る。そこで霧囲気は主体の内面性の奥底まで浸透し、心的平衡を維持するのに不可欠な内部と外部の区別を無効化してしまうのである。』外へ (Au dehors)」と題された最終章のなかで、レヴィナスは、ここでは空間の開けそのものと同一視された霧囲気の侵入的性格と、この開けに晒された主体の形態とを次のように描写している。

そしておそらく〔…〕空間の開けとは、なにかがなにかを覆うことのない外を、保護されてい

(non-protection)「襲の裏側を、住まいなし、(sans-domicile)を、非世界を、住まないことを、危険な吹きさらしを意味している。「…」空間の空虚が、不可視の空気で「…」、知覚されないにもかかわらず私の内部の奥底まで浸透している空気で満たされているということ、この不可視性ないしこの空虚が呼吸されるものであり、恐怖を引き起こすものであるということ、私に関わらざるをえないこの不可視性は私を強迫するということ「…」単なる環境、(ambiance)が雰囲気、(atmosphère)として押し掛かり、主体はそれに服従し、肺腑までも晒されるということ——これらのことが意味しているのは、存在のうちに足をつけるよりもまえに苦しみ、自らを差し出す主体性である。受動性であり、そのすべてが耐え支えること (supporter)なのだ。<sup>(17)</sup>

しかし、なんとという「主体性」だろうか。ここでレヴィナスの主体は、いかなる逃げ道も保護も安全もないまま外気に晒され、服従している。この主体は——精神病理学者たちの言にしたがえば——「健康な」主体がそこで自らの身体的かつ心的な平安を見出すことができるような住まいや私的領域を持たないとされる。この箇所において驚くべきことは、レヴィナスがこのような主体の描写にほとんど一般的な性格を与えている点である。実際、主体の受動性を示すものとしてここで「耐え支えること」と呼ばれているのは「呼吸する (respirer)」という行為にほかならない。前節で見たように、精神病理学的分析において 雰囲気は、鼻 (ミノンフスキーにおいては嗅覚) や口 (テレンバッハにおいては口腔感覚) に関係づけられていたが、レヴィナスにおいて雰囲気の浸透は主体の「肺腑」にまで達すると言われる。無論このことは生理学的観点からすれば自明であるが、レヴィナスが取り出そうと試みているこの呼吸の構造は、単純ではあるが非常に重要な事実を引き渡している。すなわち、主体はつねにすでに外部へと開かれており、口や鼻といった穴を通じて、自らではないものを自らの内奥まで吸い込んでいるということである。これこそレヴィナスが理解する



かぎりでの「精神 (spirit)」という語の意味であり、そこには他者との倫理的関係さえも認められている。「ありうるかぎりでもっとも長い息——それが精神である。人間とは、吸気 (inspiration) にあたっては中絶することなく、呼気 (expiration) にあたっては戻ることのないような、もっとも長い息が可能な生物ではないだろうか。[...] 空間の開けとは、世界も場所ももたない自己の開け、非一場所 (Un-ort) であり、壁に囲まれていないことである。そして、最後まで吸い込んで呼気 (＝臨終) に至るまでの吸気——それは(他者)の近さ (proximite) である [...]」。

はたして、レヴィナスのこのような常軌を逸した思想はどのように解釈されるべきだろうか。精神病理学的観点からすれば、少なくとも『存在するとは別の仕方』で描写されたようなレヴィナスの主体は、なんらかの心的疾患に苛まれている「患者」(すなわち patient) と見なされかねない。それどころか本稿の冒頭で見たように、レヴィナス自身がこの著作で、「外傷」や「精神病」といった語を用いるのをいささかもためらっていないのである。このことはもちろん、「他なる人間に対する同じ憎悪の犠牲者たち、同じ反ユダヤ主義の犠牲者たち」に言及しているこの著作の有名な献辞とも無関係ではありえないだろう。レヴィナスの伝記的・哲学的な道程を考慮に入れるならば、雰囲気に関するこのようなレヴィナスの思想は、個人的で自伝的な性格しか持っていないのだろうか。終わりなき喪に沈んだ病んだ主体、メランコリーの主体が問題になっているのだろうか。

この問いは明らかに『存在するとは別の仕方』という著作の叙述スタイルそのものに関わるものであり、本稿ではそれに深入りすることはできない。そのかわりに暫定的な結論として触れておきたいのは、雰囲気の問題が非常に早い時期からレヴィナスの関心を捕らえていたという点である。このことを示しているのは、若きレヴィナスがリトアニア語で執筆した論文——現在知られているかぎりでは唯一のリトアニア語論文である——「仏独両文化における精神性の理解」(一九三三)である。フランスおよびドイツの哲学が「精

神性 (spiritualité) の概念をどのように考えているのかをリトアニアの読者に紹介しているこの論文で、レヴィナスは当時を代表するドイツ文学を題材にしながら霧囲気の主題に目配せを行っている。すなわちトーマス・マン『魔の山』(一九二四)である。レヴィナスはこの小説のうちに、高地(山)と低地(平野)のあいだの根本的な対立を見て取っているが、この対立はなによりもまず空気の濃度の差異によって導かれている。「小説の活動の地としてダヴォスを選んだことで、トーマス・マンは非常に幸福な文学的効果を獲得している。ダヴォスの空気は、死すべく定められたわれわれが、そのうちで自身の運命と格闘している霧囲気〔大気〕の密度を超越している<sup>(4)</sup>」。死の不安に取り憑かれ、それゆえ生物学的生に執着しているにもかかわらず、山上に暮らすひとたち——結核患者たち——は逆説的にも「精神性の源泉」に触れているとレヴィナスは言う。彼はこのような具体的実存と不可避的な死との錯綜のうちに——これはハイデガーにおいても見られる錯綜であるが——ドイツ文化における精神性の概念が完全な形で具現化しているのを認め、さらにこうも付け加える。「死の息吹のなかで、形而上学的な霧囲気が構成される」。小説の主人公であるハンス・カストルプが対面するのを余儀なくされるのは、まさにこのような「霧囲気」である。「到着したその日から、彼はダヴォスの霧囲気に奇妙な仕方で酔わされていると感じている。この霧囲気は彼を引き付けると同時に、彼に嫌悪感を抱かせてもいる。彼は、この霧囲気がどのような精神的な踏み外しを約束しているのかを漠然と予感し、ひとが分解に恐れを抱くように、この霧囲気に恐れを抱くのである<sup>(5)</sup>」。ここでレヴィナスは、興味を引き付けると同時に嫌悪を催させるという霧囲気の両義的な性格を見て取っている。この小説の筋書きが示しているように、生の具体性と死の切迫が奇妙な仕方でもつれあい、すべてを包摂する霧囲気のなかでは、健康と病気の区別そのものも消え去ってしまいかねないのである。

ここまで見てきたように、「精神」という語の意味を問い続けたレヴィナスにとって、霧囲気の主題は大

きな関心領域の一つであった。レヴィナスが理解する精神とは、霧囲気に侵食されるに至るまでに深く呼吸し、なおかつ霧囲気に「酔わされ」ることのない主体性のあり方であったと言える。空間のうちに拡がり、空間と一体となった霧囲気は、主体のうちなる他者の他性、あるいは主体に浸透することでつねに近づいていくような「近さ」を表している。主体に押し掛かる霧囲気の重みのしたにあって、それを「耐え支える」ことは、あたかも主体が宇宙の中心であるかのような倫理的意味をまとうことになる。精神病理学において霧囲気の侵入は主体の内部性の危機であったが、外部である霧囲気がつねに主体のうちに入り込んでいる構造を強調することによって、レヴィナスは主体の内部に陥入する他性を描き出すに至っている。

この哲学者の一過性の関心であるどころか、たえずその関心を離れることがなかった霧囲気の問題は、かくしてレヴィナスの思想における重要な位置を占めているのである。

## 註

- (1) Emmanuel Levinas, *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, La Haye, Martinus Nijhoff, 1974.
- (2) あるインタヴューでの発言を参照。「[...]」フロントは「[...]」フロイトに非常に敵対的な、とりわけベルクソンの心理学を展開しました——この敵意は、深く消えることのない印象を私に与えました」(Emmanuel Levinas, « Ethics of the infinite » (an interview with Richard Kearney), in Richard Kearney, *Dialogues with Contemporary Continental Thinkers*, Manchester, Manchester University Press, 1984, p. 49)。
- (3) レヴィナスとトカランに關しては優れた論集 Sarah Haysam (ed.), *Levinas and Lacan. The Missed Encounter*, New York, State University of New York Press, 1998 を参照。ウニコリコトとの關係に關しては、つひわけ Jean Pisanié, « Levinas-Winnicott, le rendez-vous manqué », *La psychiatrie de l'enfant*, 451, 2, 2002 を参照。
- (4) Eugène Minkowski, *Vers une cosmologie* [1936], Paris, Payot, 1999, p. 115, 強調は『』コンノスキー。
- (5) *Ibid.*, p. 119.
- (6) Eugène Minkowski, « Espace, intimité, habitat », *Stratton. Beiträge zur phänomenologischen Psychologie und Psychopathologie*, v. 1, Utrecht/Antwerpen, 1954, p. 179.
- (7) Hubertus Tellenbach, *Geschmack und Atmosphäre*, Salzburg, Otto Müller Verlag, 1968, p. 155, 強調はテレンバッハ。

- (8) *Ibid.*, p. 156. 強調はハイフンで。
- (9) Gaston Bachelard, *La poétique de l'espace* [1957], 9<sup>e</sup> éd., Paris, PUF, « Quadrige », 2007, p. 24.
- (10) Otto Friedrich Bollnow, *Mensch und Raum* [1963], 10. Aufl., Stuttgart, Kohlhammer, 2004, p. 136.
- (11) Cf. Hermann Schmitz, « Was leistet das Wohnen für die emotionale Stabilität ? », *Gauche*, 1/1979, p. 58.
- (12) Emmanuel Levinas, *De l'existence à l'existant* [1947], 2<sup>e</sup> éd. augmentée, Paris, Vrin, 2004, p. 65.
- (13) Emmanuel Levinas, *Totalité et infini* [1961], 4<sup>e</sup> éd., La Haye, Martinus Nijhoff, 1984, pp. 125-126.
- (14) 特記 Yasuhiko Murakami, *Hyperbole. Pour une psychopathologie levinasienne*, Amiens, Association pour la promotion de la Phénoménologie, 2008 の第二章「住まいと、ウィニコットにおける移行領域」を参照。この議論においては、家の保護的役割のみならず、レヴィナスが家と結びつける「女性的なもの (le féminin)」の解釈も問題となる。
- (15) Emmanuel Levinas, *De l'existence à l'existant*, *op. cit.*, p. 95.
- (16) *Ibid.*, p. 104.
- (17) Emmanuel Levinas, *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, *op. cit.*, pp. 226-227. 強調はハイフンで。
- (18) *Ibid.*, p. 229.
- (19) *Ibid.*, p. V.
- (20) この著作では、主体と他者との「近さ」が問題となるといふよりもむしろ、「ますます近く」という仕方で隔たりが狭まっていく運動の果てに近さの「最上級」としての「私」が組上に載せられる。これは他者に対して近い主体ではなく、近さとして、構造化されている主体であり、それをあらためて一個の概念として考えることはできない。そこからレヴィナスはこう述べる。「もはや《自我》(Moi) や《私》(Je) がなんであるのかを言うことはできない。いまや一人称で語らなければならぬ」(*Ibid.*, p. 104)。また他方で、レヴィナスが二〇世紀の災厄を思い起こす際に、かつて〈ある〉を形容するために用いていた表現(空虚、眩暈、深淵など)をふたたび取り上げていることも忘れてはならない。Cf. Emmanuel Levinas, « Sans nom », [1966], in *Noms propres*, Montpellier, Fata Morgana, 1987, p. 178. ユダヤ人の同化の脆弱性をあらわにしたヒトラー主義時代においては、「私たちは砂漠に、風景なき空間に、あるいは、ただ私たちを含むためにだけに——墓のように——つくられた空間に戻ってきた。私たちは容器としての空間に戻ってきたのだ」(*Ibid.*, p. 179)と書かれている。
- (21) Emmanuel Levinas, « La compréhension de la spiritualité dans les cultures française et allemande », [1973 (Kinnas)], n° 5, v. 7, 1933], traduit du lituanien par Lindmila Edel-Matulis, *Gités*, n° 25, 2006, p. 133. このテクストは 1994 年に研究者によって発見されて英訳されたもの(« The understanding of spirituality in French and German culture », trad. by Adrian Valerius, *Continental Philosophy Review*, 31, 1998)。この英訳からフランス語に重訳された(« La notion de spiritualité dans les cultures française et allemande », trad. par Marie-Cécile Dassonneville, *Seis. Juffé et chrétiens dans le monde d'aujourd'hui*, n° 11, 2000)。このハイフン語からあらためて仏訳されたテクストから引用している。
- (22) *Ibid.*, p. 134.